



診療科トピックス ①

大学病院として緊密な医療連携を重視
小児の二次・三次救急対応と医療的ケアの実践

▶ 東海大学医学部附属病院 小児科 教授 山田 佳之

診療科トピックス ②

最新機器「ダヴィンチXi」2台目の導入で拡充する
婦人科疾患・腫瘍に対するロボット支援手術

▶ 東海大学医学部附属病院 産婦人科 講師 町田 弘子

診療科トピックス ③

東京都のコロナ専用病院として運用
「コロナ後」における地域密着医療を強化

▶ 東海大学医学部附属東京病院 院長 海老原 明典(呼吸器内科 教授)

診療科トピックス ④

断らない“ラストホープ”の役割を目指す
地域に即した急性期外傷治療と低侵襲治療

▶ 東海大学医学部附属八王子病院 整形外科 教授 内山 善康

医師会紹介 ● 秦野伊勢原医師会

地域連携 ● 東海大学医学部附属病院 乳腺外科
教授 新倉直樹



大学病院として緊密な医療連携を重視 小児の二次・三次救急対応と医療的ケアの実践

● 東海大学医学部附属病院 ●

一次・二次救急では対応が困難な 重い基礎疾患のある患者さんが数多く来院

東海大学医学部附属病院小児科は、神奈川県西部の主要な小児科救急医療施設として、予防医療、養育教育、二次から三次までの救急医療を担ってきました。

一般的に夜間、来院する小児の救急患者さんは、発熱やけいれん、嘔吐・下痢などの消化器症状、肺炎・気管支炎などの呼吸器疾患、感染症が多くを占めます。また当院では、一次・二次救急で対応が困難な、重い基礎疾患のある方も多く対応しております。さらに神奈川県ドクターヘリ運用機関である高度救命救急センターを有し、各分野の外科医が常駐していることから転落や熱傷などの小児の外傷にも対応しています。

なかには虐待が疑われるような外傷症例も年々増えており、体罰や虐待から子どもを守るための「子ども権利擁護委員会」を院内に設置し、各診療科の専門医や総合相談室のソーシャルワーカー、看護部や渉外対策室と連携しながら虐待の抑止に取り組んでいます。

患者さんの受け入れについては、大学病院はとかく敷居が高いと捉えられがちなため、地域の先生方が紹介をためらうことのないように垣根をなくすことが必要です。先方の状況を尊重して丁寧に話を聞き、相手の立場に立ちながら対応していくことが大切で、常に気持ちよく電話を受けることを徹底するのもその一つです。細やかな配慮や気遣いを大事にしつつ、地域の先生方との連携を強めていきたいと考えています。

実際、先生方の見立てに沿って当科へご紹介いただくことで重症疾患が見つかるケースもあり、症状のボーダーラインから重症疾患をいかに見分けるかが重要であると感じます。

小児医療施設がそれほど多くない神奈川県西部地区においては、地域の状況も踏まえて二次救急の患者さんも受け入れながら、より重症な患者さんへの対応に尽力していきたいと考えています。

小児科医が専門家として集中管理に携わり 各科との協力体制を構築しながら救急に対応

三次救急病院である当院には、緊急処置や緊急手術を要する小児熱傷や交通外傷、急性中枢神経疾患の患者さんが数多く搬送されてきます。形成外科や整形外科、脳神経外科、呼吸器外科が治療の中心となる一方で、ほとんどの症例で小児科医が専門家として実際の集中管理に携わり、各科との協力体制を構築。当科ではPICU（小児集中治療室）に近い集中治療対応ができると自負しています。

さらに救命救急科の指導のもと、当科の小児科医にはドクターヘリに搭乗するために講習会の受講が義務付けられています。救命救急科の要請に基づいてヘリ搭乗が常時可能であり、救急対応には小児科医全員があたることが出来ます。

いっぽう地域の救命救急士とも病院全体として緊密なコミュニケーションを大事にしており、「子どもを



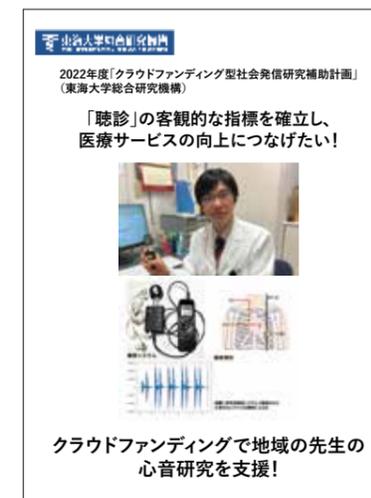
東海大学医学部附属病院小児科の診療風景。右上の数字は2022年の同科での入院患者数

小児病床数 57床
小児入院患者数 771名
(2022年)
(総合周産期母子医療センターを除く)

救いたい」という強い気持ちを共有しながら、当科の救急体制や地域の特性を理解してもらいつつ、今後も連携を図っていきたくて考えています。当院の外来で管理中の小児重症患者さんについては自宅での急変も予想されるため、ご家族に対して、救急救命士によって開催される消防署での蘇生講習会等を積極的に受講してもらうような指導も行っています。

医療的ケアが必要な患者さんへのフォローを 考えることが、今後の急性期医療に必要な視点

昨今の小児科医療の現場においては、重症心身障害、寝たきりなどで医療的ケアが必要なお子さんへの対応も重要です。寝具の位置一つで心身の状態に支障をきたすこともあるなど管理が難しい面があり



開業医の先生の研究支援のためにクラウドファンディングも実施（心音判定システム構築の研究）

東海大学医学部附属病院 小児科

急性疾患はもとより高い専門性が要求される慢性疾患や救急疾患に至るまで、小児に関連した疾病に幅広く対応。専門外来として、各疾患別臨床班（集中治療、周産期医療、血液・悪性腫瘍、循環器、腎尿路、神経、内分泌・代謝、呼吸器、アレルギー・免疫、膠原病）に専門のスタッフを配置しています。



東海大学医学部附属病院
小児科 教授
山田 佳之

「私の専門分野はアレルギーです。特殊なアレルギーに対する食物負荷試験が必要な患者さんをご紹介いただいています。アレルギーの予防や治療、心身的な問題を抱える患者さんについてもできるだけ相談に乗っていきたくて思います」

専門領域：小児科学、アレルギー学、臨床検査・感染制御

資格：日本小児科学会専門医・認定小児科指導医
／日本臨床検査医学会臨床検査専門医・管理医
／日本アレルギー学会専門医・指導医
／インфекションコントロールドクター／臨床研修指導医

ますが、当科ではこれまで数多く受け入れてきました。

急性期治療やNICU医療を経たあとなどで、一命を取り留めた患者さんに医療的ケアが必要になるケースは少なくありません。ご家族が長期にわたってケアしていくのは難しい面があり、そうした慢性期をフォローしていくための取り組みにも注力しています。

急性期医療を本当の意味で担っていくには、こうしたケアも含め、患者さんやその家族との長いお付き合いを視野に入れていくことが大切です。また、急性期治療後に引き受けてもらえる体制づくりを進めることも必要でしょう。そうした連携が今後の地域医療において先端的な役割を果たすことにつながると思います。

当科は開設以来、地域の医療機関の先生方との連携が最も重要と考えて、さまざまな役割を担ってきました。明らかに三次救急に該当するような患者さんだけでなく、病態の深刻度が不明確な方も遠慮なくご紹介いただき、柔軟に受け入れていくことが重症化を防ぐ大切な一歩と認識してこれからも対応してまいります。

最新機器「ダヴィンチ Xi」2台目の導入で拡充する 婦人科疾患・腫瘍に対するロボット支援手術

● 東海大学医学部附属病院 ●

技術認定医3人を中心に腹腔鏡手術と ロボット支援手術を安全で確実に実施

婦人科疾患の手術は、従来開腹手術で対応していた症例が低侵襲治療に移行しています。東海大学医学部附属病院産婦人科では2015年より腹腔鏡手術を開始し、子宮体がん、子宮頸がんの患者さんに年間約100例近く実施してきました。

2018年、ロボット支援手術（ダヴィンチ）も良性疾患の子宮全摘術、子宮体がん手術が保険適用になり、当科でも2022年8月にロボット支援手術を導入しました。現在、3名の医師が日本ロボット外科学会のロボット支援手術のライセンスを持ち、術者として多くの実績を蓄積するとともに、若手の医師に丁寧な指導を行っています。ちなみに日本婦人科ロボット手術学会においても、認定医制度の確立に向けて現在準備が進められているところです。

「ダヴィンチ Xi」の2台目を導入 いっそう拡充するロボット支援手術

ロボット支援手術は鉗子の操作や動きが腹腔鏡に近いので、当科では腹腔鏡技術認定医としての経験も活かしつつ、ダブルライセンスで安全に手術に取り組んでいます。

ロボット支援手術導入から1年、当科では60例近

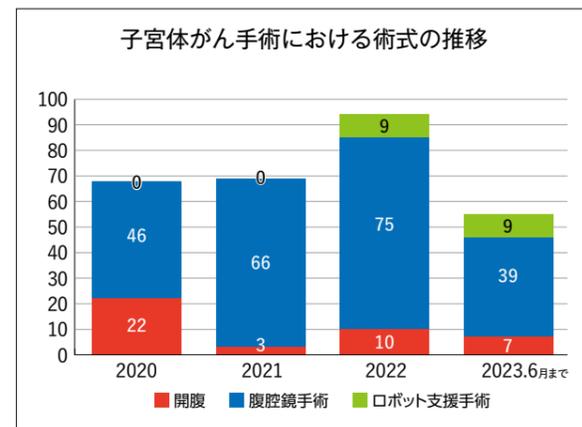
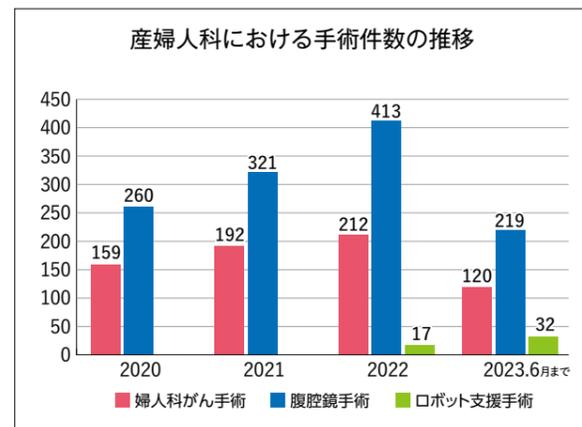
い症例を事故なく安全に実施しており、神奈川県下においてトップクラスといえる症例数を重ねてきました。腹腔鏡手術と合わせて2022年は98例の子宮体がん手術を実施し、2023年度から手術適応症例の2～3割はロボット支援手術になる見込みです。

現在、金曜日と土曜日をロボット支援手術枠とし、一日に2～3件を実施しています。手術支援ロボット・ダヴィンチは第4世代の最新機器 Xi を使用しており、2023年1月に2台目が導入されたことから、2023年以降は年間70症例以上を実施していく予定です。

ロボット支援手術と腹腔鏡手術のメリットは何より傷が小さいことで、細かい神経や血管まで丁寧に処理でき、出血量は100cc以下です。術後の負荷が小さいことも特徴で、手術日から3～4日で退院できるため、患者さんの負担が少なく、術後の社会復帰も早いことは皆さまご存じの通りです。

もちろん、ロボット支援手術の適応に向く人、向かない人がいることは事実です。骨盤の手術は頭を下にするため、緑内障の病態が重篤な方には不向きであり、腹部の癒着や炎症が起こった後の人にも適していません。ただし、肥満体型の人には適応可能です。腹壁が厚く重量があっても、ロボットによるアシストがあるため、術者の手が疲れることなく安全に手術を行うことができます。

良性疾患についても、個々の症例についてカンファレンスによって審議し、手術適応を決めています。



ダヴィンチが難しいときには腹腔鏡手術でも十分に対応できますのでご安心ください。

当科ではダヴィンチ Xi を複数導入することによって、手術までの待機時間が短縮されるメリットが得られています。今後は、子宮体がんのロボット支援手術でセンチネルリンパ節生検も行っていく予定です。

子宮頸がんに対する低侵襲手術も 適応を精査し積極的に実施

子宮頸がんについては、2019年に米国で LACC trial (ラクトライアル) と呼ばれる大規模比較試験が実施され、腹腔鏡手術は開腹手術よりも再発率が高く生存率が下回るといった結果が示されました。一時期、日本でも子宮頸がんの腹腔鏡手術を控える状況が生まれましたが、施設ごとの技術の差や手技の



手術支援ロボット・ダヴィンチ Xi による最先端の低侵襲手術を実施している

東海大学医学部附属病院 産婦人科

子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんなどの婦人科悪性腫瘍に対して最新の治療ガイドラインに準拠しながら手術、化学療法、放射線療法を行っています。

また、腹腔鏡技術認定医による悪性腫瘍に対する腹腔鏡手術や遺伝性乳がん卵巣がん症候群 (HBOC) における予防的卵巣・卵管切除術を実施するほか、遺伝



東海大学医学部附属病院
産婦人科 講師
町田 弘子

「当科は日本産婦人科学会の『本邦の婦人科がん治療における施設治療症例数・施設属性の予後との関係』の研究を行い、症例数が多い病院での治療と予後に関連があることを発表しました。当院の症例数の多さを示す証左にもなり、安心して受診いただくことができます」

専門領域：婦人科腫瘍、婦人科手術

資格：日本産婦人科学会認定医・指導医／日本婦人科腫瘍学会専門医・指導医／日本がん治療学会認定医／日本臨床細胞学会認定医／日本ロボット外科学会 Robo-Doc certificate 国内B級／日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医／Da Vinci Certificate

違いが影響しているとも考えられ、現在では日本婦人科腫瘍学会が安全な基準を定めた上で手術を実施し、良好な結果を得ています。

当科には手技レベルの高い医師がそろい、術前のカンファレンスで危険が少ないと判断したうえで、がんの顔つき（病理学的悪性度）、組織系などを精査して手術適応や治療法を決めています。遺伝子診療科や病理診断科と連携して実施するがんゲノム検査もそのひとつです。

こうした術前での正確な評価、検査はもちろん、婦人科腫瘍においては術後もチームで集学的治療を行っていくことが欠かせません。化学療法が良いのか、放射線治療が適しているのかといった点を積極的に意見交換するなど、他の専門科との連携も非常にスムーズです。そうした要素を含め、子宮頸がんの腹腔鏡手術についても安全な状況のなかで高い治療成果を得ることができています。

子診療科や病理診断科と連携してがんゲノム検査も行っています。

当院は日本周産期新生児医学会指定研修施設に認定されており、総合周産期母子医療センター、小児科や小児外科など院内の他科と連携した診療体制があるのも特徴のひとつです。

東京都のコロナ専用病院として運用 「コロナ後」における地域密着医療を強化

● 東海大学医学部附属東京病院 ●

東京都初のコロナ専用病院として 累計約1600人の患者を受け入れ

コロナ禍のなか、東海大学医学部附属東京病院は2020年7月に新型コロナウイルス感染症の重点医療機関として認定を受け、同年9月より東京都から要請を受けて新型コロナ専用病院として運用を開始しました。病棟をすべてコロナ専用にし、中等症から重症の患者さんを数多く受け入れた一方、院内の感染対策を徹底し、外来の一般診療、検診や人間ドックなども継続して行いました。

2021年8月の第5波では、重症化する患者さんがかなり増えてきて、コロナ病棟のベッドも満床に近い状態に移行。これらの患者さんには酸素が相当量必要なことから、従来の1分間300ℓの酸素流量から1分間600ℓに倍増する配管工事を行い、高流量鼻カニューラ酸素療法（ネーザルハイフロー）を駆使して、通常の酸素マスクでは酸素の取り込みができない患者さんに対応しました。ネーザルハイフローは合併症を起こしにくく低侵襲に、患者さんの苦痛もなく人工呼吸器と同じレベルの呼吸管理ができるものです。

当院は2023年6月までの中で、延べ約1600人のコロナの患者さんを受け入れました。5月からは新型コロナの感染症法上の位置づけが2類相当から5類に移行しましたが、その後もコロナ病棟は40

床を残しています。今後の9波、10波への対応も考えながら、地域に必要とされる医療体制を整備しつつ、状況に柔軟に対応していく所存です。

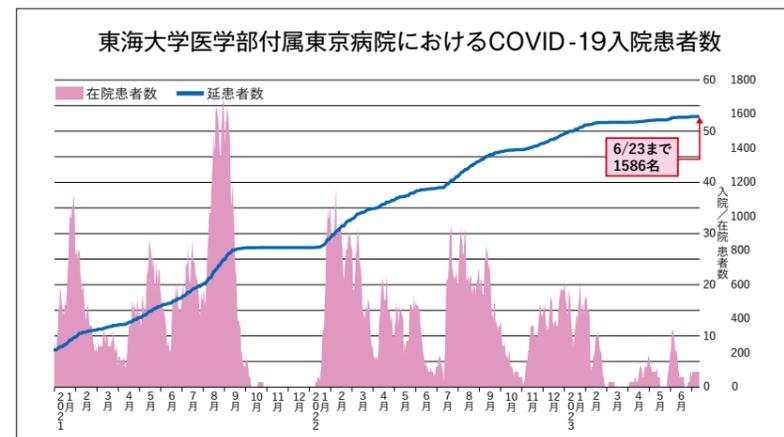
専用病院として運用した経験を活かし コロナ後遺症外来など特殊外来の開設も

コロナ後の大きな問題のひとつとして、後遺症に苦しんでいる患者さんが行き場所を失っている点が挙げられます。“コロナ後遺症難民”と言われるほど、後遺症の診療を受けられずに苦しんでいる人が存在しているのが実情です。当院はそうした医療ニーズの現状や予測を踏まえ、漢方外来の永井良樹医師が中心となって、「コロナ後遺症外来」を立ち上げる予定です。

新型コロナウイルス感染症の後遺症は大きく分けると、呼吸器疾患の息苦しさなどの症状、心筋炎などの心臓に関連した症状、さらに脳神経系の脳炎などの疾患があります。これらをトータルで診ようとした場合、西洋医学的なアプローチだけではなかなか難しい面があります。

したがって漢方によるアプローチは重要であり、加えて呼吸器内科、循環器内科、脳神経内科などが立体的にコラボレーションし、科学的な分析を含めて対応していくことでレベルの高い診療が提供できると考えています。

コロナ後遺症は、基礎疾患のない若年層に多いと

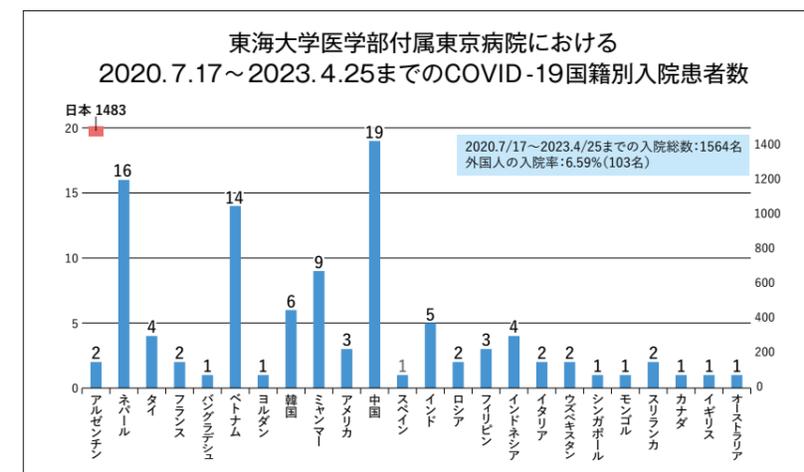


コロナ対応時における転院搬送の様相

いう特徴があります。比較的軽症で自宅療養によって治る一方で、後遺症ですっと苦しんでいる若い人が多いわけです。その際に医療機関を受診すると、心療内科や精神科に紹介されるケースも見受けられます。そうではなく、あくまでも根本的な治療という観点からコロナ後遺症を診ていくことができるのは当院ならではの強みであると考えています。

大学病院としての高度急性期医療と 地域医療の拠点病院の役割を両立する

当院は大学病院ですが、地域密着型の病院という性格も兼ね備えてきました。これまで役割として、渋谷区医師会の地域医療連携担当理事を務めるなど、地域とのつながりの構築に力を注いできた経緯があります。今後も渋谷区内の在宅医療の先生や地元のクリニックの先生などとの連携をさらに密にしていきたいと思っています。



東海大学医学部附属東京病院 呼吸器内科

呼吸器内科では、COPD（慢性閉塞性肺疾患）、気管支喘息、肺炎などの呼吸器感染症、肺がん、間質性肺炎、肺線維症、肺血栓塞栓症、睡眠時無呼吸症候群、急性・慢性呼吸不全などすべての呼吸器疾患の診断と

治療に迅速に対応しています。MDCT、気管支鏡など検査体制も充実し、呼吸不全に対する在宅酸素療法、睡眠時無呼吸症候群に対する在宅治療や、禁煙外来も開始するなど患者さんのQOLの改善に努めています。



東海大学医学部附属東京病院
院長 呼吸器内科 教授
海老原 明典

「当院は地域の拠点病院として、クオリティとホスピタリティの充実を図り、地域の皆さんにさらなる高度な医療と、顔の見える温かい医療の双方を提供していきたいと考えています」

専門領域：新型コロナウイルス感染症・呼吸器感染症、慢性閉塞性肺疾患（COPD）・気管支喘息・肺がん、地域医療

資格：日本内科学会認定内科医・指導医／日本呼吸器学会専門医・指導医／日本呼吸ケア・リハビリテーション学会代議員／日本禁煙学会専門指導医／人間ドック健診専門医・審議員／日本医師会認定産業医／日本旅行医学会認定医／インфекションコントロールドクター（ICD）

急性期病院への入院適応は難しいものの、在宅対応までは必要ないといった高齢の患者さんにどう対処するかに、地元の医師会は苦慮されているようにも思います。当院では急性期の高度医療は継続しつつ、高齢者医療の下支えをして引き続き地域との連携を図っていきたいと考えています。

いま医療は高度化して専門ごとに細分化されていますが、そこに当てはまらない患者さんは当然います。高度医療にそぐわない疾患や不定愁訴のような症状

に対する医療が重要である一方で、既存の医療機関はその部分が不十分になりがちです。

その意味でも総合的な医療のクオリティを高めることが求められ、当院でも人間ドックや予防医療、高齢者の健康管理を提供するための態勢づくりに力を入れていくことが必要です。これからも高齢者を総合的に診る姿勢を大事にしつつ、地域に貢献する役割を果たしてまいります。

断らない“ラストホープ”の役割を目指す 地域に即した急性期外傷治療と低侵襲治療

● 東海大学医学部附属八王子病院 ●

急性期外傷を受け入れる体制づくりにより 「最後の砦」としての役割を確立する

東海大学医学部附属八王子病院整形外科はこれまで、頸椎から腰椎に至る脊椎・脊髄および脊椎外傷、手・肘関節を中心とした上肢、膝関節・股関節を中心とした下肢について、各専門家が疾患・外傷を問わず幅広く対応してきました。その中で、特に急性期外傷および肩関節外科を主な分野として注力していく態勢が整いつつあります。

交通外傷や滑落外傷については、重篤な患者さんが対象となるケースが少なくありません。当院はすぐ近くに中央自動車道が通っていることもあり、重大な交通事故が発生するリスクはおのずと高いものがあります。必然的に交通事故に関する急性期外傷に日夜対応していくことが求められています。

救急救命士との勉強会を実施した際、「近隣には急性期外傷の患者さんの搬送先がなく、都内まで搬送している」という話を聞きました。こうした状況にある患者さんにいち早く対応していくための環境づくりは急務の課題であり、今後はスタッフや医療機器をはじめとして、八王子地区で手薄だった急性期外傷に対応できる態勢を整え、従来の困難症例も積極的に受け入れていきたいと考えています。

現在、当科の医師は8名、うち7名が日本整形外



当科の柱の1つである低侵襲手術。膝、肩、股関節には関節鏡手術を実施

科学会認定専門医です。上肢（4名）、脊椎（2名）、下肢（2名）と専門医が揃っており、外傷を含めた変性疾患、慢性疾患までを網羅して診ることができます。骨腫瘍など専門性が高い疾患については、神奈川県にある東海大学医学部附属病院とコラボレーションしながら治療していきます。

当院の強みは、各医師が専門分野以外に、救急にきちんと対応できる点です。地域の「最後の砦」という自覚を持ちながら、救急は断らないスタンスで日々の診療にあたっています。

さまざまな低侵襲治療を積極的に取り入れ 高齢者にも優しい治療を提供する

当科におけるもう1つの柱が、肩関節外科を中心とした低侵襲治療です。凍結肩をはじめ、肩腱板断裂に対しては関節鏡を併用した腱板修復術、反復性肩関節脱臼に対しては関節鏡視下関節唇修復手術を中心に、患者さんへの負担の少ない治療を実施しています。

膝・股関節にも関節鏡手術を行うほか、脊椎手術には「O-arm」という手術中撮影できる画像システムにより、高精度な3D画像でイメージングしながら安全な手術を実施することが可能です。

人工股関節置換術では、3次元コンピュータ術前



術中コンピュータアシスト（ナビゲーション）によって手術成績の向上を目指す

計画（股関節CT検査結果をコンピュータに認識させ、3次元骨格モデルを形成）を導入し、術中コンピュータアシスト（ナビゲーション）による手術成績の向上を目指します。

これらの低侵襲手術は患者さんの体力的・経済的な負担の軽減、入院期間の短縮はもちろん、手術後の早期の社会復帰を可能にするものです。低侵襲治療は高齢患者さんにとってメリットが大きく、従来のギプス固定などの保存的治療だけでなく手術の選択肢が増えることによって、患者さんの負担軽減につながっています。

全身状態の良くない患者さんも含め、治療時の苦痛が少ない低侵襲手術をいっそう進めていきつつ、今後もさまざまな先端治療を積極的に取り入れていく所存です。

スポーツ外科の専門を活かし 地域のスポーツ選手のサポートを

急性期外傷と肩関節外科のほかに、当科ではスポーツ外科についても力を入れていきたいと考えています。八王子市には運動部の活動が活発な大学や高校が多く、スポーツ選手が大勢在籍しています。

スポーツによるケガや故障は、専門的な治療法を施すことで好結果につながりやすく、整形外科の取り組みとしても手応えを得やすい分野といえます。より良い形での競技復帰を目指して、リハビリテーションを中心とした保存治療から関節鏡視下手術まで幅広く対応できるのが当科です。スポーツ外傷を



東海大学医学部附属八王子病院
整形外科 教授
内山 善康

「当院は開院当初から二次救急を担う救急センターがあり、若いうちからさまざまな症例を経験することで、重篤な患者さんに対応する高い能力を身につけています。手術の適応に関しても、患者さん本人やご家族の要望に則し、バランスを考えながらベストな治療を提供しています」

専門領域：肩関節疾患、肩肘スポーツ障害、重度四肢外傷

資格：日本整形外科学会専門医／日本体育協会スポーツ医

積極的に手掛けていくために、各学校やクラブチームの指導者ともコミュニケーションを緊密にしながらさまざまな形で連携していきたいと思えます。

整形外科疾患においては、治療に必要なのは手術半分、リハビリ半分といわれており、競技への完全復帰にはリハビリテーション科の役割が非常に重要です。今後もリハビリ医と緊密に連携しながら、術後のリハビリスケジュールを丁寧立てた中で、病院全体の取り組みとして回復に向けたプランを慎重に実行していきます。



iPhoneを使用した「AR Hip Navigationシステム」。最新のテクノロジーをiPhoneという使い慣れたデバイスで使用できる、人工関節におけるコンピュータ支援システム。多くの施設で導入が可能な、簡便かつ高精度なシステムとして注目されている

東海大学医学部附属八王子病院 整形外科

日本整形外科学会認定整形外科専門医が7名在籍し、上肢（肩・肘・手関節、手指）、脊椎・脊髄、下肢（股・膝関節）・骨軟部腫瘍など各専門の分野の医師が診療を行っています。

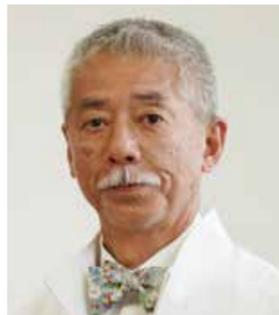
頸椎から腰椎に至る脊椎・脊髄および脊椎外傷、手・

肘関節を中心とした上肢、膝関節・股関節を中心とした下肢それぞれの専門家が、疾患・外傷を問わず幅広く対応。高度で繊細な医療を提供するとともに、東海大学医学部附属病院と連携を取りながら、より専門性の高い診療を行っています。

[秦野伊勢原医師会]

各地域の保健・医療・福祉事業の推進を図り、地域医療の中心的役割を担う医師会。今年6月、新たに秦野伊勢原医師会会長に就任された秋澤孝則先生(秋澤医院院長)にお話を伺いました。

一般社団法人 秦野伊勢原医師会
会長 秋澤 孝則 先生



「顔の見える関係性」のなか 秦野と伊勢原の両市で緊密に連携

神奈川県西部に位置する秦野市と伊勢原市は、都心から小田急小田原線で1時間ほどのベッドタウンとして知られています。人口は秦野市が約16.2万人、伊勢原市は約10.1万人で、当医師会は2つの自治体にまたがり組織されている点に特徴があります。

2023年4月現在の会員数は216名で、所属事業所は141機関です。地域には東海大学医学部付属病院をはじめ、独立行政法人国立病院機構神奈川病院、秦野赤十字病院、伊勢原協同病院があり病診連携も非常にスムーズです。

秦野伊勢原医師会の長所は、診療所同士の相互連携が活発で、異なる自治体にまたがりつつも、お互いに顔の見える関係性で活動できている点です。そのメリットが最大限に活かされたのが、新型コロナウイルスへの対応時の「コロナサポート」でした。

神奈川県からの要請に基づき、当医師会と両市の訪問看護ステーションなどが連携してコロナ自宅療養者をサポート。自治体の垣根を越えて、他方の市に住む患者さんを含めて診ていく柔軟な診療体制を構築しました。自治体ごとの縦割りではなく、地域を面としてとらえて取り組むことができたのは、普段から医師会を通じて付き合いの深かった両市の診療所だからこそだと思います。

こうした会員同士の交流を深める機会の1つに、医師会主催で積極的に開催してきた各種の勉強会があります。年に複数回開催する学術講演会や、診療科ごとの勉強会など、スキルや知識を常にアップデートするための勉強会を活発に行っています。コロナ禍ではWebでの開催が中心でしたが、今後は会員同士の親睦を図る意味でも対面での各種勉強会を再開していきたいと考えています。

このほど新たに会長職を拝命し、今後進めてい

たいと考えているのが、「医療従事者の安全を確保するための対策」に関する取り組みです。患者トラブルに診療所だけで対応するのではなく、医師会が介入して安全を担保できるようにするもので、地域のさまざまなリスクに関する情報を警察と共有するなど仕組み化していきます。

昨今、診療所の医師が被害に遭う凶悪事件が全国で発生していることから、医師会が窓口になって地域の犯罪リスクの情報を把握し、医療従事者の安全を確保するための対策を確立していく備えを充実させたいと考えています。

今後の課題は、減少傾向にある学校医と休日夜間急患診療所の勤務医を増やすための取り組みを拡充していくこと。当医師会は地元で医師の育成機関がある恵まれた環境に位置し、実習の受入れなど人材面で協力する関係が期待できます。そうした点を踏まえ、お互いに顔が見えるつながりを維持しながら地域に貢献していきたいと思っています。

地域医療連携拠点

各種勉強会の積極的な開催など
地域医療の質を保つために活動



秦野市と伊勢原市の地域医療を支える秦野伊勢原医師会。地域医療・福祉に貢献するため、行政と一体となり、休日夜間一次救急、各種検診業務、学校医、幼稚園医、保育園医の活動、1歳半健診、予防接種、介護保険などに積極的に取り組んでいます。

秦野伊勢原医師会
〒257-0031 秦野市首屋11番地 TEL.0463-81-5018
詳しい情報は、
<https://hadanoisehara-med.or.jp> をご覧ください。



地域の先生方との連携を強化し 県西部の乳がん診療の充実を図る

東海大学医学部付属病院
乳腺外科

乳房再建、遺伝子診療、治験… 専門性の高い乳がん診療を提供

当院は地域がん診療連携拠点病院であり、乳がん治療においても神奈川県西部地域で重要な位置付けを担っています。患者さんは、東は海老名、西は小田原、熱海など広域から紹介され、30~40代の方が多いのが特徴です。当科では乳腺専門医5名が中心となり、病理医や放射線医、コメディカルスタッフとのチーム医療で個々の患者さんに対応しています。

また近年は、乳房再建、遺伝子診療、治験など大学病院ならではの診療にも力を入れています。乳房再建については当院の形成外科で、遊離腹部穿通枝皮弁法、広背筋皮弁法などの自家組織を用いる方法、インプラント法いずれも対応可能です。2022年は乳房切除術203例のうち乳房再建まで行ったのは28例でした。これは神奈川県では2番目に多い数です。

遺伝子診療については、遺伝子診療科と連携し、遺伝性乳がん卵巣がん症候群の診断および乳腺と卵巣の予防切除などを行っています。この検査は年間約100例実施しており、5~7%が遺伝性乳がん卵巣がん症候群と診断されています。予防切除を希望されるのは5例ほどです。また現在も多くの臨床試験や治験が進行中で、2022年の治験の受託件数は23件でした。

乳がんは早期であっても、手術後に10年間のフォローアップが必要です。そのため当院にて手術を行った患者さんのうち、地域の病院での受け入れに問題がない方は、地域の病院にて経過観察やホルモン療法などをお願いしています。

なお、10年が過ぎても再発するケースがあります。そのような患者さんを見逃さないためにも、地域の先生方には女性の患者さんに乳がんの既往を確認していただきたいと思っています。患者さ



東海大学医学部付属病院 乳腺外科 教授
新倉直樹

乳がんにおける腫瘍径別生存率

	症例数	無再発生存率(10年)	全生存率(10年)
tis: 非浸潤癌	288	99.0%	100.0%
t1: 腫瘍径2cm以下	1355	89.4%	92.3%
t2: 腫瘍径2cm以上5cm以下	1320	74.8%	82.7%
t3: 腫瘍径5cm以上	243	60.1%	71.8%
t4: 腫瘍が皮膚や胸壁に浸潤を認める	83	34.9%	57.8%

(東海大学医学部付属病院乳腺外科)

んの肺に水がたまっている、あるいは肝臓にしこりがある等、乳がんの再発・転移かもしれないと意識するだけでも、診断のスピードが違ってきます。地域の先生方との連携を強化して、神奈川県西部の乳がん診療を一層充実させていきたいと考えています。

東海大学医学部付属病院 乳腺外科

乳腺症や乳腺炎などの良性疾患から悪性疾患まで幅広く対応しています。2022年の手術件数は390例、うち乳がんは334例でした。乳がん看護認定看護師も在籍し、患者さんのQOL向上を目指してサポートしています。

Think Ahead, Act for Humanity



東海大学 医療連携通信 No.12 (2023年9月発行)

発行責任者／東海大学医学部附属病院 病院長 渡辺雅彦

本誌の内容は2023年9月現在の情報に基づいています。詳細は、各病院にお問い合わせください。

東海大学医学部附属八王子病院
〒192-0032 東京都八王子市石川町 1838
TEL: 042-639-1111 (代表)
<https://www.hachioji-hosp.tokai.ac.jp/>
お問い合わせ先 ▶ 事務部事務課
TEL: 042-639-1111 (代表)
予約について ▶ 医療連携室
TEL: 042-639-1114 (直通)
FAX: 042-639-1115 (直通)



▲ 病院のご案内



▲ 外来診療担当表

東海大学医学部附属東京病院
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-2-5
TEL: 03-3370-2321 (代表)
<https://www.tokyo-hosp.tokai.ac.jp/>
お問い合わせ先 ▶ 医療連携室
TEL: 03-5333-3066 (直通)
FAX: 03-3379-1287 (直通)



▲ 病院のご案内



▲ 外来診療担当表

東海大学医学部附属病院
〒259-1193 神奈川県伊勢原市下糟屋 143
TEL: 0463-93-1121 (代表)
https://www.fuzoku-hosp.tokai.ac.jp
お問い合わせ先 ▶ 医療連携室
TEL: 0463-93-8495 (直通)
FAX: 0463-93-1125 (直通)
メール: renkei@tsc.u-tokai.ac.jp



▲ 病院のご案内



▲ 外来診療担当医一覧